

## 要 旨

自己というものが、対人関係や社会的文脈に応じて多面的に変化するという言及は多く存在する。技術の進歩によって人間関係の数や種類、その結び付きの強さが増大化した現代社会では、関係性や場面状況に応じた多面的な自己呈示が要求される。自己の多面性は、対人関係を円滑にする点で適応的な在り方であると看做される一方で、「本当の自分」と「偽りの自己」という区別的な自己認識や心理的負担に結び付く可能性も指摘されてきた。しかし近年では、自己の多面性が心理的負担に結び付かず、異なる自己の側面を全て「本当の自分」として受容する人々の増加傾向が先行研究で報告されている。本研究では、辻（1999）の自我構造モデルを基に、これら 2 つの自己観の潮流を一元的自我・多元的自我として整理し、その違いに影響する要因を社会的環境との関連から明らかにすることを目的とした。社会的環境には、家族場面・アルバイト場面・友人場面の 3 場面を設定し、自己の変化量や自己本来感、社会的圧力の知覚程度による影響を検討した。

調査では、自己観（6 項目尺度・類型選択）、自己の変化量、自己本来感、社会的圧力の 4 つの変数から測定を行った。調査対象は大学生 112 名であり、既述した 3 場面を想定する質問紙調査を実施した。自己観の測定では、一元的自我および多元的自我の特徴を反映した 6 項目尺度を作成すると共に、図を提示して考えに近い方を選択させる類型選択法を用いた。自己の変化量は、各場面で呈示している自己を日本語版 Ten Item Personality Inventory（小塩他, 2012）によって評定させ、場面間の差を算出した。自己本来感の測定は、対人関係における自己の自然さや受容感を測定する Relational Needs Satisfaction Scale（Žvelc 他, 2020）を用い、社会的圧力の測定は、他者からの期待や自己抑制の程度の測定を目的とする項目を作成した。

分析の結果、自己観の類型選択は対応する尺度得点と整合しており、群間比較において一元的自我群は多元的自我群よりも自己の変化量が有意に大きいことが示された。一元的自我群を対象とした「本当の自分」と各場面における自己の差に関しても、場面による有意な影響が確認された。自己本来感および社会的圧力の各尺度の信頼性を検討した結果、自己本来感の高い内的一貫性を示し、自作の社会的圧力に関する尺度についても概ね許容範囲の信頼性が確認された。自己観を被験者間要因、場面を被験者内要因とする二要因分散分析を行った結果、自己本来感および社会的圧力のいずれも群および場面の主効果が有意であった。自己本来感は多元的自我群で高く、場面別では家族場面で最も高くアルバイト場面で最も低い結果となった。一方で、社会的圧力は一元的自我群で高く、アルバイト場面で最も高いことが示された。各自我類型と自己本来感・社会的圧力の関連を検討するために重回帰分析を行った結果、一元的自我得点は自己本来感の場面間変化量から正の影響、社会的圧力の場面間変化量から負の影響を受けていた。一方、多元的自我得点については、いずれも有意な結果は得られなかった。

考察として、自己の変化量が大きいと矛盾や葛藤処理等のためにメタ的な「本当の自分」を持つ一元的自我の傾向を示し、自己の変化量が小さいと複数の自己をある程度一定の「本当の自分」として受容可能になることで多元的自我傾向を示す可能性が考えられた。二要因分散の結果からは、一元的自我の場合、場面環境における社会的圧力知覚の高さによって自己呈示上の負荷が高まり、その抑制感から自己本来感が低下したと推測された。一方、多元的自我では社会的圧力の知覚の低さから、場面ごとに異なる自己を区別する必要性が低下し、いずれの場面における自己も本質的な自己として受容可能になることで、多元的な自己観と結び付いた可能性が示唆される。自己観の違いが場面環境での経験を生み出す因果の場合、一元的自我は「本当の自分」ではない自分による選択であると認識することで自己本来感が低下し、多元的自我は全てを「本当の自分」による選択であると理解するために自己本来感が上がったという自己決定理論との関連が窺えた。重回帰分析の結果では、一元的自我の場合、場面における自己本来感の変動と社会的圧力の比較的一様な知覚がそれぞれ異なる過程を通じて区別的な認知的枠組みの形成・強化に寄与した可能性が考えられた。また、多元的自我が有意な影響を示さなかった点については、多元的自我にとって場面間の変動が自己理解の様式を直接影響する要因になり得ず、複数の自己を包摂する枠組みが先行的に機能している可能性が示唆された。